

苦笑

菅田 忠志

日本には微妙な言いまわしや、繊細な表現をしたことばが多い。特に季節の移り変わりに沿ったことばの多いのは、日本の地理的な場所とも大いに関係しているといふことだろう。

春先の桜の開花具合の表現でも「つぼみ堅し」からはじまり、つぼみふくらむ、ちさほら、三分咲き、五分咲き、満開近し、満開、散りはじめ、落花盛ん、葉桜と、移りゆく花の情景をこまやかに表現したり、**氷雨**、**五月雨**、しぐれ、**涙雨**、**菜種梅雨**と雨についてもなかなか多彩である。

また、日本には和歌や短歌、俳句・川柳に四字熟語やことわざなどがあり、幅広いことは文化を築いてきた。四字熟語やことわざなどは、今なお日常会話やビジネス会話にも広く使われている。

ところで、四字熟語やことわざについては大体の

- 1 -

ニュアンスを知っているだけでは不十分な場合もありそうだ。

例えば、「気が置けない」は、気を使わなくてもよい。遠慮する必要がなく、心から打ち解けられることをいうのだが、「気が許せない」と間違つて解して使っていることが多いので要注意のことばのひとつといえよう。

昔、仕事を発注している外注さんの職場に女房がアルバイトで勤めていた頃、その社長に「菅田さんちは、**破鍋に綴蓋**やねえ」と言われ、苦笑するしかなかつたわと言っていた。

このことわざは、自己紹介をするときなどに謙遜用語として使ってきたが、人様から聞くときちょっと拍子抜けがすることばである。

その後、納品にきた彼に「合わぬ蓋あれば、合つ蓋ありといつげん、君んちとこの蓋の合い加減はどうなん？」と聞いてみた。彼はちよつときよとんとしていたので、「うちは破鍋に綴蓋や」といって、意

- 2 -

を解したのか「うちの鍋は破れ具合がひどいもんで
…」と彼も照れ笑いをしながらハンカチで額の汗を
ふいていた。